

あくまでも自分史として

「岳陽」と共に

第 43 号

発行日
2025.01. 15
編集・発行
井上講四／堂本彰夫
※連絡先
〒901-2225
沖縄県宜野湾市
大謝名 3-13-24
教育協働研究所
～岳陽舎～
(井上講四宅)
Tel:098-963-9282
E-mail:
gakuyou17@outlook.jp

○新年に想つー月日は百代の過客!!

今日は、新年の5日である！再び、この「新通信」を書き始めようとしているが、やはり何度も、ありきたりの新年の挨拶みたいなもので始めるのは、何か味気ない(吾がなにい?)!!そこで思いついたのが、かの「松尾芭蕉」の「月日は百代の過客」である！正確には、「月日は百代はくたいの過客かかくにして、行きかふ年もまた旅人なり」(『奥の細道』冒頭文)であるが、その意味は、「月日は永遠の旅人であり、過ぎては訪れる年もまた旅人のようなものである。」ということらしい(ウィキペディアより)。

言われてみれば、まったくそのようにも思うが、ようやく、その心境が分かるようになったということかもしれない!!否、まさに、そうなのだと思えるということであるが(ただし、芭蕉は、50歳で亡くなっているようなので、私の方が、遥かに高齢者なのであるが!!)、驚いたことに、彼は、これもまた、かの有名な「西行(法師)」を崇拜していたらしい(さもありません?)!であれば、句(歌)の「わび、さび」はともかく、彼らは、「無常」とか、「儚さ」とか、人生の蘊奥(悲哀?)を等しく見つめていたのではないかとということである!!人(特に晩年)の世とは、まさにそうなのだということである!!

いずれにしても、私もまた、そうした月日の流れの中で、「私の旅」をなしているわけであるが、残念ながら、私の場合は、それを彩るものがない(あったとしても、徐々になくなっている?)しかも、ここで彼らを持ち出すことには、多くの人から顰蹙を食らうであろう?)!!

○変わってはいるが、変わっていないものもある!!

さて、上の流れと一緒にの私のような気もするが、今年の新月もまた、私は、ここ沖縄の我が家で迎えた。以前(二期)ではあるが、は、宮崎の長女一家の家で、次女・三女も駆けつけて、慌ただしい、そして騒がしい? (孫3人)新年を迎えていたが、それこそ時の流れで、今年のようなスタイル(次女・三女も沖縄)になっっている次第である。本日は、長女一家も、この地に戻り(ただし、彼女らが育った家は、ここではない!!)、新たな年の第一歩を踏み出して欲しいのであるが、それは、現実的には難しいということである(長女は、別な家族をなしているということである!!)。

それはともかく、ここで書いておきたいことは、娘達が帰ってくれば、何かと昔のことを思い出し、束の間の親子(父と娘)関係を、無理矢理演じようとしている自分がいっていることであるが、しかし、互いに年を取り、ほとんどのことが、再現不能?ということになるということである。とは言え、双方共に、そうした関係で、毎年を積み重ねていることは事実ではあるので、その意味では、いつもと変わりはないとも言えるのである!!

しかも、正月の場合は、最寄りの「普天間神宮」に初詣に行くのであるが、近場の駐車場から歩いて行き、着くと、拝礼・祈願、破魔矢・お守り・おみくじ(娘達だけ)買い、干支看板の前での記念写真、そして、帰りの参道での「綿菓子」買いと、まるで昔のままなのである!!ちなみに、綿菓子買だけは、流石におかしいとも言えるのであるが、変わらぬ関係(光景)を意図的に懐かしんでいるとも言える(次女・三女達も、そう思っている?)!!

○年賀状哀歌? なかなか切れない遣り取りの縁!!

ところで、私は、一昨年の古希の時、年賀状を出すことを基本的に止めた(親類、限られた友人・知人を除いて)。もちろん、いただいた賀状には、可能な限り返信はしているが(短くても、自筆のあるもの。ただし、卒業生のそれは、すべて返信している!!)、もうこの人とは、形式的な遣り取りは止めたいのであるが、なかなかそうもいかない現状ではある(今年も、何通かはあった!!)。

だが、いずれにしても、この年賀状というものは、自分のこれまでの生きてきた証しではある! 普段は、ほとんどの人のことなどを忘れて、目の前の雑事、人間関係にかまけているわけであるが、いざそれを受け取れば、この人とは、あの時、あんなつき合いがあった!そして、お世話にもなった! そういうことを思い出すのである! だが、月日が流れ、その時々との関係は、ほとんどなくなってしまう! しかも、住む場所、働く場所が変われば、そして、その働く場所さえもなくなってしまう! えば、その関係、そのつき合いは徐々に薄れ、消え去ってもいくのである。それが、人の世の定めなのである!

翻って(この言葉、久し振りに使うが?)、最近よく「断捨離」ということが言われるが、こと「人間関係」においては、なかなかそうもいかない? どんなに懐かしいものであっても、いわゆる「物」であつたならば、自らの意思で(断腸の思いで?)、一方的にその関係は断ち切れるのであるが、「物思ふ」人間であれば、そうはいかない? もちろん、先方も、そう思っていることであろう!! ある意味、それでよいのである! だが、いずれにしても、そうした遣り取りは、やがて、自然な形で消滅していく!!

最後になるが、H県在住のKさん(88歳、わざわざ書いてあった!!)から、「お元気でお過ごし下さいませようお祈りします。」先生 私共が心血を注いで来た社会教育とは一体何だったのかの心境です。」という、手書きの文を添えた賀状を頂いた(正確には返信?)。実は、このKさんからのものが、ここでの書く動機となっているのであるが、人には、誰かに、最後に言いたいことがあるのである? 本日に、Kさんにはお世話になった! Kさんは、教員出身の人である! (井上)

○「多層重複近似構造」！表現は硬いが正鵠を射ている!!

○太陽／月／星、そして、龍蛇／鯨／熊／犬神信仰!

○改めて、古代九州の全体像を探る―その14―

新年の冒頭に当たって、(ここ)でも書かなければいけないことではないが、忘れてはいけないので、そして、今の私(堂本)にとつては、とてつもなく重要なこととなるので、以下、急遽書き留めておくことにする。それは、等(トートテム信仰)に関わることである!これには、おそろ他ならぬ、私の古代史研究(「旅」と称しているが!)に関わることであるが、最近とみに増えた、Uチューブ視聴からアイデアである!実は、そこに、とても刺激的で、興味深いチャンネルがあるのである。それは、「ふどきさんの物に対するそれが、よく分らない!!」

〈特別コーナー〉堂本彰夫の古代史旅枕⑭

宿禰 仲哀天皇、そして応神、仁徳と続く(に彩られた)虚偽?の王統の時代、すなわち、「混乱」、そして「空百の150年(4世紀後半〜5世紀)」、さらに、そこから生じた「倭の五王時代」、そして、その最後の「武」の後の「筑紫倭国」と「豊国倭国」の分離・分立、さらには、筑紫倭国の王統交代／豊国倭国の近畿移動と、本堂に目まぐるしく変転している!!しかも、そこには、中南部九州の熊襲(熊襲曾於)系勢力「紀(熊)木(貴?)氏」「目下部氏」「久米氏」、さらには「多氏」、そして半島からの新羅・伽耶系勢力、その後の百済系王族の流入・渡来が絡んでいるのである!!

わかるものなのである(ひよっとしたら、これまでの定説を大いに覆すものとなるかもしれない?ただし、難解ではある?)!! 無生物のすべてに明確な霊的本質があると信じるもので、しかるに、彼は(多分男性?)そして、比較的若い?)、自らあることである。」とあるが、不思議なことに、私には、の古代史解明の手法(視点)を、「多層重複近似構造」(の)後者の方は、よく分かるような気がする!問題は、前者の「発見」という名称で、「記紀」に示された史実?を、全体方であるが、少なくとも、その動物(トートテム)は、自分達であるが、まさにその手法(視点)は、私が、徐々にそのであったことだけは分かる!!

そんな中、まだまだ仮説、否、それ以前の状況かもしれないが、とにかく、6世紀前後に、新たな大きな枠組みが成立するということになる!!

視点からしか描けないからである(「記紀」は、単なる九州王朝史のパクリではない!!)!!

思いを深めていたことと符合するのである(もちろん、私)!!

「遺跡」時代(3世紀前後?)を始点にして創り上げられているのではないかと?そして、それ以降の史実?が、「神話(神代)」と「歴史(人代)」へと、言わば二層拡散的に振り分けられているのではないかと?ということである!!

・短歌に託して再び、変わらぬ?新年を迎えて!!

・月日を旅人と詠む その人もまた旅人ぞ

だから思い出さずも 旅となす

・変わってはいいるが そうではないと思いたい

その証としての 綿菓子買い?

もちろん、それは、国の創始を古く見せるためでもあつたろうが、そこには、もう一つ大きなからくりもあつた!!

・賀状に絡んだ それぞれの生

その意味分り合える 若いであれ

それは、最も分かりにくい(だから重要であつた?)「倭の五王」前後の真相(空百の4世紀)等を、「神話」に託して描いているということである!!全くの「他人の種」で旅を続けている素人の私が、こう言うのも、どこか恥ずかしい(当人にも申し訳ない!)のであるが、本堂に正鵠を射ているのではないかと、共感、賛同している次第なのである。

・「多層重複近似構造」? 難しそうであるが 隠された真実は そこにあるかも!!

・自然はともかく 何故動物にまで?

神秘・霊的本質・象徴 人はそこに何をみた?

とすれば、そこで亡くなったのは、新生公家(の)「豊国倭国」の王族(軍君/男弟王)と、その子「安閑」「宣化」だったのかもしれない?しかも、その太子・皇子を弑逆したのは、異母兄弟とされた「欽明天皇」だった(それが辛亥の変?)?そして、その「欽明天皇(実は蘇我稲目が)が、大和で「上宮王家」蘇我王権を確立した!!まあ、そういうことでもあるが、とにかく、ここでは、かなりの政変があつたことは間違いない!!ということである(そう考えれば、前後の辻褄が合う?)!!(ついで)

〈編集後記〉 過日、新年が明けた。どんな年となるのか?敢えて書かないが、確実に日々は訪れ、去っていく!そして、それに随伴しながら、関わる思いや意味を綴っていく他ない!!井上/堂本